

## 平成 29 年度 JERT 主催救急撮影講習会(鹿児島)参加報告

公益財団法人 昭和会 今給黎総合病院 中央放射線部 稲留久恵

平成 29 年 7 月 16 日（日）、鹿児島市の米盛病院にて開催された救急撮影講習会を受講しました。以前から救急撮影認定技師に関心があり、講習会に参加したいと思っておりましたが、遠方での開催が多かった為、なかなか受講するまでにいたりませんでした。しかし、今年は 2 月に熊本、7 月に鹿児島と九州圏での受講のチャンスがありましたので、今回参加させて頂きました。

今回は、他職種(医師・看護師)のスタッフが診療放射線技師に何を求めているのかということについての講義がありました。自身のこれまでの行動を振り返りながら聴講していましたが、自分の撮影を優先させてしまいがちになったりして、周囲のスタッフがどのようにして欲しいのかという事まで常に考えて行動出来ていたのか？考えさせられました。

中でも、CT が「死のトンネル」と言われていると講師の方がおっしゃった事が私の中で衝撃的な言葉で強く印象に残りました。普段、当たり前のように撮影に使っている CT 装置がそんな風に思われているなんて夢にも思わず、衝撃的というよりショックを受けました。確かに、検査には数分～数十分の時間を要しますし、初療室などの救急処置を行う為の部屋ではないので、それなりの対策を講じていますが、救急処置を行う環境としては当然不十分です。努力しても、待ち時間無しで検査出来る保証もありません。撮影室と初療室が離れている病院は、移動時に急変する危険性を抱えながら撮影室まで移動することもあるでしょう。装置の冷却方式によっては、室内全体の室温が低すぎて、体温の管理をしている時などはリスクを負った上の検査だと。

考えてみたらその通りなのかもしれませんが、「死」という言葉で表現されていたことに対する衝撃は結構大きなものでした。言い換えれば、そのくらいの意識で検査に臨んでいるスタッフがいる一方で自分はどうかだったか？と。その温度差を少しでも埋めるべく他職種との相互理解を深め、救急医療チームの一員という自覚をもち、今後、更に活躍できるよう努力をしていきたいと強く感じました。

最後に、このような講習会等の活動を通じて、鹿児島はもとより、九州・全国の救急医療に関する活動が今以上に活発化する一助になればいいなと思っております。

平成 29 年 7 月 吉日

